# ４．開拓期は戦争の時代



## ① 人が、そして馬も戦場へ

明治39年（1906）、日露戦争勝利を祝い、利別市街（池田町）に建てられた凱旋門。

利別太（池田町）の名古屋孫太郎さんの負傷（実は戦死）の報せ。

（写真：２点とも『池田町懐かしのアルバム』より）

開拓の時代は、日本が外国と何度も戦争をおこなった時代でもあります。

明治27～28年（1894～95）の日清戦争。明治37～38年（1904～05）の日露戦争。

そして、昭和12年（1937）から始まった日中戦争は、昭和15～16年（1941～42）の東南アジアへの侵攻、さらに太平洋戦争（第２次世界大戦）へと拡大し、昭和20年（1945）の敗戦まで続きました。(ほかにも武力による戦いは起きています)

十勝開拓が本格的になったのは明治29年（1896）から、十勝で徴兵がおこなわれたのは、明治31年（1898）からです。そのため、多くの十勝の人にとっては、日露戦争からが、大きなかかわりを持ってきました。

明治37年（1904）、日露戦争で戦死した名古屋孫太郎さんの葬儀。
凋寒村（池田町）の村葬としておこなわれた。

（写真：『池田町懐かしのアルバム』より）

### 日露戦争と十勝

日露戦争の時、利別太（池田町利別南町）は、十勝川（今のオシタップ川）の舟着き場の街であって、十勝内陸で最も発展した市街地のひとつでした。（→ｐ175）

この利別太のある凋寒村（池田町）からも、何人かの若者が日露戦争に出征しています。遠く中国大陸で、ロシア軍と戦ったのです。

日露戦争は、日本の勝利となりました。利別太でも戦勝パレードがおこなわれています。しかし、非常に苦しい戦争で多くの犠牲がはらわれました。

凋寒村の名古屋孫太郎さん、岩間太吉さん、遠藤音治さんらは戦死し、村による葬儀がおこなわれました。

### 馬も戦場へ

明治から昭和にかけて、農作業に、荷物運びに、さまざまな工事に、そして馬車にと、馬は大きな力を発揮しました。

そのため、とくに馬産地としても有名な十勝では、馬に対するさまざまな思いから「馬頭観音（馬頭観世音菩薩）」がたくさん設置されています。（→ｐ199）

馬は、戦場でも兵士や武器などを運ぶのに、大きな役割を持っていました。軍馬※1として育てられたものだけでは足りないので、徴発※2といって、農家などの馬が買い上げられます。

十勝からも多くの農耕馬が大陸にわたり、戦場で働きましたが、敗戦後、置き去りにされ、ほとんどが殺されたといいます。

軍馬として徴発された馬「玄海号」。飼い主である村田さんも昭和17年（1942）召集されて戦場に向かった。

（写真：『池田町懐かしのアルバム』より）

※１　軍馬（ぐんば）：軍馬のほかに戦争に利用された動物には、犬（軍用犬・主にシェパード）もある。

※２　徴発（ちょうはつ）：強制的にものを取り立てること。とくに、軍隊が使うものを集めること。

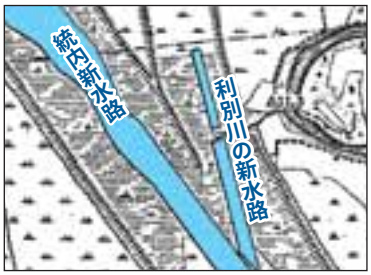
※３　武運長久（ぶうんちょうきゅう）：戦いでよい運がずっと続くこと。

# ② 十勝空襲と敗戦

日中戦争が始まり、昭和12年（1937）、出征する兵士たち。池田神社（池田町）で武運長久（※3）を祈る。　（写真：『池田町懐かしのアルバム』より）

（右）アッツ島に上陸した日本軍守備隊。昭和18年（1943）、全めつした。

（写真：『池田町懐かしのアルバム』より）




昭和21年（1946）発行の地形図。利別川の新水路工事が途中で止まっている。

（国土地理院所蔵の1/5万地形図（十勝池田）使用）

統内新水路（→p190）が通水した昭和12年（1937）、日中戦争が始まりました。戦争は長期にわたります。

昭和15～16年（1941～42）、日本軍はフランス領インドシナ（ベトナム）へ侵攻します。

昭和16年（1942）、日本はアメリカ・イギリスに宣戦布告して太平洋戦争が始まります。戦線は、東南アジアからオーストラリアまで広がりました。

昭和17年（1942）以降、日本軍は南方の戦いに負けることが多くなります。昭和18年（1943）には、北方のアッツ島（アリューシャン列島）で守備隊が全めつします。

北の強化のため、昭和19年（1944）、帯広の第７師団（熊部隊）など、十勝各地にも日本軍部隊が駐屯します。

昭和20年（1945）、東京空襲などの本土空襲、沖縄での地上戦、広島・長崎への原爆投下、ソ連の対日参戦などを受け、他国民もふくめて数百万～２千万人以上ともいわれる戦争犠牲者を出した末に、日本は降伏しました。

## 戦争によって止まった河川工事

十勝川に続いて、利別川でも新水路をほって、統内新水路につなげる計画でした。

工事は昭和12年（1937）に始まりました。しかし、戦争が長引き、激しくなる中で、昭和18年（1943）には工事が中断されてしまいました。（→p206）

工事用の機械や機関車は、中標津の飛行場建設などのために持っていかれました。

工事の再開は、敗戦後の昭和25年（1950）を待たねばなりませんでした。

## 十勝空襲

十勝からも多くの人が戦場に行き、傷つき、戦死しました。帯広市史の戦没者名簿だけで、1,465名もの人が載っています。

戦火は十勝にもやってきます。昭和20年（1945）７月14日と15日、アメリカ軍の飛行機が十勝各地をおそいました。

14日には、池田町・豊頃村・帯広市・音更村・幕別村が、15日には、本別町・帯広市・音更村・大樹村・大津村（厚内）・浦幌村・広尾村・士幌村・幕別村・大正村（上更別）が、空襲を受け、60名が死亡しました。

とくに、本別での空襲※4は激しいものでした。およそ50分間、40機以上による爆弾・機銃などの攻撃を受け、亡くなった人40名（うち女性23名）、けがをした人14名、全焼した家279戸、罹災した人1,915名という、大きな被害が出ました。

本別を攻撃した爆撃機のひとつと同型機

空襲を受け、炎上する本別市街。このけむりの下で、40人もの人が死んでいった。　（写真：2枚とも本別町歴史民俗資料館蔵）

※4　本別での空襲（ほんべつでのくうしゅう）：本別を空襲したアメリカ軍機の攻撃隊は、帯広など別の攻撃目標を持って空母から飛び立ったが、当日十勝が雲におおわれ目標を見つけられなかった。その後、たまたま雲の切れ間の下に本別があったため、各攻撃隊の隊長判断で攻撃を決めたという。本別とは思わず、池田だと思って攻撃した攻撃隊もあったらしい。（参考：「記録本別空襲（本別町図書館、1983）」、「トカッチ 16 号（2004）」の『アメリカ海軍資料に見る北海道空襲（松本尚志）』）